

厚生科学研究
(子ども家庭総合研究事業)

リプロダクティブ・ヘルス(性と生殖に関する健康)から
見た子宮内膜症等の予防、診断、治療に関する研究

平成13年度研究報告書

平成14年 3 月

主任研究者 武 谷 雄 二

目次

I. 総括研究報告書	
リプロダクティブ・ヘルス（性と生殖に関する健康）から見た子宮内膜症等の 予防、診断、治療に関する研究	
東京大学医学部産科婦人科 教授 武谷雄二	
 373
1) 一般社会よりみた月経痛に関する意識調査	
 375
(資料) アンケート調査用紙	
 395
2) わが国における月経痛の社会的総費用——直接費用と間接費用の推計	
 399
II. 研究成果の刊行に関する一覧表	
 403

総合ならびに総括研究報告書

リプロダクティブ・ヘルス（性と生殖に関する健康）から見た子宮内膜症等の
予防、診断、治療に関する研究

研究代表者	東京大学医学部産科婦人科	教授	武谷雄二
分担研究者	東京大学医学部産科婦人科	教授	堤 治
	鳥取大学医学部産科婦人科	教授	寺川直樹
	近畿大学医学部産科婦人科	教授	星合 昊
	群馬大学医学部保健学科疫学医学統計学	教授	林 邦彦
研究協力者	東京大学医学部公衆衛生学	教授	小林廉毅
	東京大学医学部産科婦人科	助手	百枝幹雄
	東京大学医学部産科婦人科	助手	大須賀穰
	鳥取大学医学部産科婦人科	講師	原田 省
	近畿大学医学部産科婦人科	講師	小畑孝四郎

研究要旨

昨年度は、大規模な一般女性を対象とした調査により、月経痛の現状を明らかにした。なかでも、月経痛に対し何らかの医学的介入を必要とする女性が全体の約3分の1に相当することは注目すべき事実であった。また、月経痛が就労に与える影響として、月経痛のため半年のうちにも一日でも仕事を減らしたり、休んだりする女性が27.3%存在することが判明し、就業において月経痛は女性のQOLを低下させていることが明らかとなった。今年度の研究では企業、役所などの一般社会において月経痛という生理現象もしくは病的異常がどのように意識され、対応されているのかを調査するため、企業、役所等14施設、合計265通のアンケートを依頼した。241通の回答を得ることができ（回答率91%）、男性と女性は各々51.7%と48.3%であった。年齢層は20才から60才までほぼ均一に分布しており、管理職、非管理職は、各々34.8%、65.2%であった。アンケートは、回答者の背景に関する質問、月経痛についての知識に関する質問、周囲の女性の月経痛を職場で経験しているかなどに関する質問、月経痛に対する配慮を含めた意識に関する質問に大別された。まず、月経痛についての知識に

関して以下の特徴が認められた。出産後の月経痛軽減に関しては、年齢層が高いほど正しい知識を持っている傾向があり、男性で特にこの傾向が強かった。月経痛が子宮内膜症と関係があることに関しては女性の方が知識をもっていた。また、月経痛に対して鎮痛剤を使用する割合に関して年齢層の低い女性の方が、使用割合を多く見積もる傾向にあった。これらの結果は、主として自分、もしくは周囲の者に関する経験より知識を得ている傾向をうかがわせた。身内に月経痛で困っている人がいた経験があると答えたものが4割あったことから、経験により月経痛に関する知識を得る機会の多さが推測された。一方、職場で月経痛に関して相談を受けたことがあるものは約20%と少なく、月経痛により休憩・早退している者が周りにいるかどうか判らないと答えたものが多かったことより、職場での周囲の者の月経痛に関連した実状は把握されていないことが多いと思われた。別の観点からみると、月経痛に関しては相談を控える女性が多く存在し、相談したいと考える相手も限定されていることが想像された。月経痛が仕事に与える影響については、男女の意識の違いが目立ち、男性の方が月経痛の仕事に与える影響を大きく見積もる傾向があった。具体的には、男性の方が女性よりも、月経痛で悩む女性に仕事の配慮をすべきであると考えられる傾向にあり、一方で、月経痛の生産性への影響は大きいと考える傾向にあった。この理由としては、男性は月経を経験することがないため月経痛に関して過剰に意識している可能性や、女性は月経痛に関して同性であるためにかえって男性より厳しく見ている可能性があることなどが考えられた。これらの問題に関しては、年齢層による意識の違い、役職による意識の違いは特に観察されず、月経痛に関する社会の意識は、性別に異なる部分が多いことが示唆された。今後、正しい知識の普及により意識の違いをより適切な方向に向けて少なくする必要性が感じられた。

以上とは別に、月経痛に関する直接費用と間接費用の推計から、わが国における月経痛の社会的費用（医療費を含む）は、年間およそ1兆円と推計された。このうち、約6割が医療費や薬剤費であり、約4割が労働損失による間接費用であった。薬剤治療と手術治療は相対的に大きな金額を占めるが、治療を受けた患者における症状の改善度は高かった。従って、なんらかの理由で未受診の患者について積極的な治療を行うことにより、わが国全体としてどの程度まで月経痛によって日常生活に支障のある女性の症状が改善され、QOLの向上や就労状況の改善に結びつくかを明らかにすることが今後の研究課題になると考えられた。

1) 一般社会よりみた月経痛に関する意識調査

はじめに

勤労女性の増加しつつある昨今において、女性特有の疾病が就労に及ぼす影響は医学的、社会的見地から早急な実態調査と対策が必要となっている。特に、月経は女性に特有の現象で、これに関連する疾病ならびに月経に随伴する諸症状は女性のQOLを脅かすとともに就労を妨げる主要な要因となっている。なかでも、子宮内膜症は頻度が高く難治性の疾患で現在本邦で診療を受けている患者は12万人以上にのぼる。これらに起因する疼痛などが就労に及ぼす影響は社会経済学的に相当大きな損失をもたらしていると考えられる。また、子宮内膜症以外の月経前緊張症、排卵期の疼痛、出血、月経困難症なども月経周期を有する女性に特有の問題で女性の就労を制約する諸因子となっていると推測される。急速な女性の社会進出が進む現在において、これらの実態の把握は十分になされておらず、その対応は遅れているといわざるを得ない。このような状況を背景として、本研究班は昨年度よりこれら月経に関連する疾患、および月経関連症状の本邦における実態を把握することを目的として研究を行っている。

昨年度の研究では、20歳～49歳までの女性人口を想定母集団とし、無作為抽出によるアンケート調査を郵送方式により10,000人を対象として行った(回答率42.3%)。月経痛に対し鎮痛剤を必要とするものは26.8%存在し、鎮痛剤服用にも関わらず日常生活に支障をきたしているものは、6%存在した。すなわち、月経痛に対し何らかの医学的介入を必要とする女性が全体の約3分の1に相当することは注目すべき事実であった。また、月経痛が就労に与える影響として、月経痛のため半年のうち一日でも仕事を減らしたり、休んだりする女性が27.3%存在することがわかった。このうち、約半数には月経痛のため休んだ日があり、休みを必要とした女性のうち約4分の1は月に1日以上休んでいると推定された。月経痛による労働損失を推計したところ、半年間で約1900億円と計算され、月経痛は社会的な問題であるのみならず、経済的な重要性も有することが示唆された。このように、月経痛は大きな問題であるにも関わらず月経中の自分の状態について周囲から理解されていないと答えたものは、全体の4割を超えており、月経に関する社会的啓蒙の必要性も伺われた。

よって、本年度は社会において月経困難がどのように意識され、考えられているかを明らかにするため企業、役所などの職場においてアンケート調査を実施した。さらに、アンケートの解析により男性も含めた他者の目から見た月経痛の実態を評価しつつ、昨年度のアンケートより明らかとなっている自覚的な月経痛と比較・考察することにより今後の月経痛に対する社会的対応の方向付けを行いたいと考えた。

対象と方法

企業・役所など計 14 施設に合計 265 通のアンケート調査を実施した。アンケート用紙は別に示している通りで、質問項目は大きく分けて、回答者の背景、月経痛に関する知識、月経痛に関する実体験、職場における月経痛に対する配慮と対応からなる。対象とした企業の内訳としては、化学系 2 社、出版系 2 社、食品系 3 社、製薬系 6 社（うち外資系 3 社）であり、役所は 1 施設であった。回収数は 241 通であり、回収率は 91%であった。回収は原則として郵送により行なった。

研究成績

A. 単純集計からの解析

本項目では、単純集計からの知見を記載する（単純集計表参照）。これらは、現代における本邦の勤労女性における月経痛に関する勤労者一般の意識を反映していると考えられるデータである。

1. 連続変数記述統計

年齢、部署構成人数、部署女性人数などの連続変数に関して平均、SD、最小、最大などの数値を示した。また、鎮痛剤を使用する割合に関するアンケートの結果も同様の処理により値を示してある。年齢は平均 40.2 歳で、最年少は 21 歳、最年長は 61 歳であった。部署の構成人数はばらつきが多く、平均は約、25 人であったが、1 人と答えたものから 800 人と答えたものまでであった。部署における女性割合の平均は 35.7%であった。

2. 年齢の度数分布

20 歳台、30 歳台、40 歳台、50 歳台に各々 20 から 30%ずつほぼ一様な分布を示した。

3. 性別

女性が 48%、男性が 52%とほぼ半数ずつの分布となっている。

4. 役職

管理職が 34%と全体の 3 分の 1 を占め、残りは非管理職となっている。

5. 部署構成人数

10 人以上 20 人未満が 34%、20 人以上 50 人未満が 27%であり、あわせて 60%以上が 10 人以上 50 人未満に集中していた。

6. 部署女性人数

5人未満が55%、5人以上10人未満が21%と合わせて75%以上が10人未満であった。

7. 部署女性割合

部署女性人数/部署構成人数を計算し部署女性割合とした。0から2割、2~4割、4~6割に20~30%ずつ分布していた。

8. 出産後女性に月経痛が少ないことを知っているかについて

「いいえ」と答えたものが60%で「はい」と答えた39%を上回っていた。あまり知られていない現象であることがわかった。

9. 月経痛と子宮内膜症の関係を知っているかについて

「はい」が63%と「いいえ」の36%を大きく上回っていた。近年、新聞などのマスコミを通じて子宮内膜症が多く報道されてたりしている事実もこの結果と関連しているかもしれない。

10. 月経痛は治療で治ると思うかについて

「思う」が61%で「思わない」が38%であった。治療に期待を寄せているものがかなりの割合いる一方で、治療に限界があるだろうと考えているものも少なくない現状が明らかとなった。

11. 月経痛のための鎮痛剤使用について

30%と実際の現状を答えたものが半数異常の55%を占めた。ついで、70%使用すると答えたものが25%、10%と答えたものが15%であった。概ね、現状は一般に把握されていると言えるようである。

12. 身内に月経痛で困っている人がいた経験があるかどうかについて

「ある」と答えたものは40%で「ない」の59%より少なかったが、現実として半数近くのもの、月経痛で困っている人を身内で経験していることがわかった。

13. 月経痛と仕事について相談を受けたことがあるかについて

「ある」と答えたものは16.6%しかなかった。月経痛で支障を感じる女性が

約 3 割存在することを考え合わせると、相談を控える女性が多く存在し、また一方で相談をしたいと考える相手が限定される傾向を示していると考えられる。

14. 自分と同じ部署で月経痛で欠勤した女性の割合について
わからないと答えたものが約半数の 51%で、これ以外では 0~1/10 位に大半が分布していた。

15. 自分と同じ部署で月経痛で休憩や早退をした女性の割合について
上記 14. とほぼ同様の結果であった。14. 15. を通して言えることは、月経痛は周囲からはわかりにくいと考えられることであり、月経痛を周囲には言いにくい状況が一般的であると考えられる。

16. 自分の部署で、月経痛の治療のために休暇をとった女性がいるかについて
「いる」と答えたものが 7.1%存在したことは、病的な月経痛の頻度が決して非常に低いわけではないことをうかがわせる結果となっている。

17. 女性が月経痛で悩んでいる場合の仕事の配慮について
この設問の解答に関しては、選択肢が「あまり配慮しなくて良い」と「ある程度の配慮をした方がよい」の 2 つしかない初期に施行したバージョンの異なるアンケートが 30 部存在していたため、大半を占める新バージョンを解析の対象とした。

「あまり配慮しなくてよい」は、3.8%と非常に低く、「ある程度の配慮をした方がよい」は約 6 割をしめていた。「多いに配慮する必要がある」は、33%と全体の 3 分の 1 であった。

18. 月経痛は女性の仕事の評価に影響を与えると思うかについて
「影響を与える」の 17%と「ある程度影響を与える」の 41%を合わせると 58%で、半数以上のものが何らかの形で月経痛が女性の仕事の評価に影響を与えると考えていることが明らかとなった。一方で、ほとんど、もしくは、全く影響を与えないと答えたものが 40%存在し、この問題に関しては見解が個人によって大きく異なることが推測された。

19. 月経痛は業績や生産性に影響を与えると思うかについて
「対応の如何に関わらず影響を与える」と「対応の如何に関わらず影響を与えない」がともに 6.6%と少数であった。一方、「対応があればほとんど影響を与えない」は 59.8%と過半数で、「対応をしてもある程度影響を与える」の 26.6%

を大きく上回り、一般に業績や生産性に影響を与えないために月経痛に対する対応は重要と考えられていることが示唆された。

B. 年齢層別のクロス集計

10歳ごとの年齢層に分けたクロス集計表についての解析結果を示す（年齢層別クロス集計表）。項目は、意味のありそうな質問項目に限定した。2水準（男女など）の変数についてはウイルクソン検定でその水準間の年齢層の違いを検定し、3水準以上の変数についてはクラスカル・ワリス検定で年齢層間の違いを検定した。有意（5%水準）なところには*印を付けています。質問項目の6, 7, 9については男女を分けた検定も施行した。

20. 男女差について

年齢層の男女差は有意に男性のほうが年齢が高い傾向を認めた。

21. 役職について

管理職の方が有意に年齢が高い傾向があった。

22. 出産後の月経痛軽減に関する知識について

出産後の月経痛軽減に関する知識は「はい」と「いいえ」の間で年齢層の差が有意で、年齢層が高いほど知識を持っている傾向にあった。男女を分けて検定するとこの傾向は女性ではぎりぎり有意でなく、男性のみで有意であった。男性の方が年齢が高いほど身内など周囲からの影響により学習する可能性が考えられた。

23. 月経痛と子宮内膜症との関係に関する知識について

月経痛と子宮内膜症との関係に関する知識についても「はい」と「いいえ」の間で年齢層の差が有意であった。ただし、出産後の月経痛軽減に関する知識とは逆に、年齢層が低いほど知識を持っている傾向にあった。しかし、この傾向は男女を分けて検定すると有意ではないことより、後述するとおり年齢層の低い女性に「はい」が多いため、見かけ上この様な結果となっている可能性がある。

24. 月経痛が治療により治ると思うかについて

月経痛が治療により治ると思うか、については「思う」と「思わない」の間に有意な年齢層の差は認めなかった。

25. 月経痛のための鎮痛剤使用について

鎮痛剤の使用がどのくらいあるかについては、年齢層間に有意な差があり、年齢層が低いほど使用割合を多く見積もる傾向を認めた。男女を分けて検定すると、この傾向は女性のみで有意になります。これは、年齢層の低い女性ほど月経痛の頻度が高いために自分もしくは周囲の人に関する経験より多く見積もるようになっている可能性をうかがわせます。

26. 月経痛に関する仕事の配慮、仕事の評価に与える影響、および、業績や生産性に与える影響について

質問項目 15, 16, 17 について年齢層間に有意な差は認めなかった。

C. 性別とのクロス集計

男女別のクロス集計表についての解析結果を示す(性別クロス集計表)。項目は、意味のありそうな質問項目に限定した。2水準(管理職・非管理職など)の変数については独立性のカイ2乗検定を施行し、3水準以上の変数についてはウィルコクソン順位和検定で男女間の差を検定した。有意(5%水準)なところには*印を付けている。

27. 役職について

性別と役職には有意な相関があり、男性に管理職が多い傾向があります。

28. 出産後の月経痛軽減に関する知識、ならびに、月経痛が治療により治ると思うかについて

性別とに有意な相関は認めなかった。

29. 月経痛と子宮内膜症との関係に関する知識について

性別との相関は有意で、女性のほうが男性より知識を持つ傾向にあります。これは、子宮内膜症が頻度の高い疾患として多くの女性に意識されるようになってきている現状を反映しているものとも考えられます。

30. 月経痛のための鎮痛剤使用について

鎮痛剤使用がどのくらいあると思うかについては、男女間に有意な差があり、女性のほうが多く見積もる傾向にあった。これは、女性の場合、自分の経験と周囲の状況を合わせて判断していたため、男性のように自分の経験がない場合より重く受け止めている現状が想定される。

31. 女性が月経痛で悩んでいる場合の仕事の配慮について

月経痛で悩む女性に仕事の配慮をすべきかどうかについては、男女間に有意な差があり、男性の方が配慮をすべきと答える傾向があった。これは、男性のほうが月経痛の実際を経験することもないため過剰に反応している部分もあると推測される。一方、女性は月経痛を生理現象とみなして必要以上の配慮は不要と考えるため、意識的に配慮をすべきでないと答えているものが多くなっている可能性がある。

32. 月経痛は女性の仕事の評価に影響を与えると思うかについて

この設問の答えに関しては男女の差を認めなかった。

33. 月経痛は業績や生産性に影響を与えると思うかについて

業績や生産性への月経痛の影響に関しては男女間で有意な差があり、男性の方が影響があると答える傾向にあった。これは、男性の方がより客観的に観察しているか、もしくは、過剰に意識していると考えることができる。逆に、女性の側では月経痛は業績や生産性に影響を与えることがあるのは望ましくないという潜在的意識も働き、影響を与えないとする傾向が多く出ている可能性が考えられる。

D. 役職別のクロス集計

管理職、非管理職別のクロス集計表についての解析結果を示す（役職別クロス集計表）。項目は、意味のありそうな質問項目に限定した。ウイルコクソン検定で管理職と非管理職の間に差があるかを検定した。

34. 月経痛に関する仕事の配慮、仕事の評価に与える影響、および、業績や生産性に与える影響について

質問項目 15, 16, 17 について年齢層間に有意な差は認めなかった。

考察

今回の研究では、回答者の年齢分布、性別分布などの背景をみると、現代日本の一般的な勤労者の全体像をある程度反映していると考えられる。月経痛に関する知識に対する回答の解析より、以下のように考えられる。月経痛に関する主たる情報源は人を介するものと、それ以外のもの（書籍、マスメディアなど）が想定される。本報告書にも掲載しているように、新聞による情報なども知識の普及に貢献していると考えられる。興味深いことに、男性の場合、出産と月経痛に関する設問の解答から推測されるように、生活を共にする家族など

からの情報により知識を吸収する可能性が高いことである。一方、女性の場合は同年齢層の周囲からの話も含め、自分の実体験などにより知識を得ていく傾向がある。特に、若年の女性が月経痛による鎮痛剤使用を高く見積もる傾向があるのは、このためかと考えられる。また、月経痛に関する意識は女性の方が高いためか子宮内膜症の月経痛との関連を 80%を超える女性が知っていた。これは頻度の高い疾患である子宮内膜症に関して、女性のほうが種々の情報源より知識を吸収している可能性が考えられた。

次に、月経痛に関する実体験に関する項目より判ったこととして、まず、周囲の月経痛をどの程度認識できるかは、身内と職場では大きく異なる可能性があるということである。これは、身内に月経痛の人がいた経験は約 40%とかなりの割合で認められる一方、月経痛のことで職場で相談を受けた経験のある者は 16%しか存在しなかったことから推測される。すなわち、昨年度の調査で明らかになっているように月経痛で支障を感じる女性が約 3 割存在することを考え合わせると、月経痛に関しては相談を控える女性が多く存在し、相談したいと考える相手も限定されていることを想像させる。この想定は、周囲の女性がどの程度月経痛により欠勤したり、休憩したりしているかを質問した項目の回答からも支持される。昨年度の調査で明らかとなったように、半年間のうちに仕事を減らしたり、休んだりした女性が約 27%存在したことを考えると、今回のアンケート結果より実態は周囲よりほとんど把握されておらず、月経痛の就労に及ぼす影響は個別には周囲にほとんどわからないことが伺われた。

最後に、職場における月経痛に対する配慮と対応に関する質問より男女で意識のひらきがあることが示唆された。すなわち、男性のほうが女性より一般に月経痛が会社の業績や生産性に与える影響が大きいと答える傾向があり、一方で、月経痛で悩む女性に配慮を十分にすべきであると答える傾向があった。この理由としては、第一に男性は月経を経験することがないため月経痛に関して過剰に意識している可能性が考えられる。つぎに女性の場合、他者として月経痛のある女性を見る場合、同性であるため男性より厳しく見ている可能性がある。これは特に仕事の配慮に関しての結果より推測される。さらに、自分のこととして考える場合、女性は月経痛が仕事に影響を与えて欲しくない、または、与えるべきではないという願望が回答に影響していることも否定できない。これらの差は役職（管理職・非管理職）の違いにおいては認められず、今後、男女間での意識の差を是正する教育・啓蒙活動などの必要性が考えられた。

結論

企業・役所など 14 施設においてアンケート調査を行うことにより一般社会における月経痛に対する意識を労働との関係を含めて明らかにした。月経痛に関す

る知識は普及しつつあるが、いまだ、性別、年齢などによる差が少なからず認められた。職場などにおいて月経痛が女性の労働に何らかの影響を与えており、配慮・対応が必要であるという認識はある程度浸透している一方で、その程度・方法などにおいて男性・女性の間で認識のずれが生じていることが明らかとなった。また、月経痛に関する相談が困難な状況が推測された。以上より、月経痛が医学的、社会的に重要な問題であることが再認識された。

今後、月経痛に関しての相談・支援体制を充実させていく必要性があり、このために、企業等においては産業医・保健婦など、地域においては保健所などの役割が期待され、これらに対する指導・教育も必要と考えられた。さらに、重症の月経困難症に対しては、医療機関におけるより有効な医学的介入の必要性が示唆された。

アンケート解析結果（表）

A. 単純集計

連続変数記述統計

	N	Mean	SD	Min	Max
Q1. 年齢	241	40.24	10.53	21	61
Q4. 部署構成人数	236	25.22	56.09	1	800
Q5. 部署女性人数	235	7.71	10.74	0	80
Q5/Q4. 部署女性割合(%)	235	35.74	23.61	0	100
Q9. 鎮痛剤使用割合(%)	236	36.05	21.22	1	70

ただしQ9は70%, 30%, 10%, 5%, および1%の離散変量

単純集計：一次元度数表

Q1. 年齢	年齢層	度数	%	累積%
	20歳以上30歳未満	50	20.7	20.7
	30歳以上40歳未満	73	30.3	51.0
	40歳以上50歳未満	60	24.9	75.9
	50歳以上60歳未満	52	21.6	97.5
	60歳以上	6	2.5	100.0
	計	241		

Q2. 性別	性別	度数	%	累積%
	女	116	48.1	48.1
	男	124	51.5	99.6
	missing	1	0.4	100.0
	計	241		

Q3. 役職	役職	度数	%	累積%
	管理職	81	33.6	33.6
	非管理職	152	63.1	96.7
	missing	8	3.3	100.0
	計	241		

Q4. 部署構成人数	人数	度数	%	累積%
	5人未満	28	11.6	11.6
	5人以上10人未満	37	15.4	27.0
	10人以上20人未満	82	34.0	61.0
	20人以上50人未満	65	27.0	88.0
	50人以上100人未満	17	7.1	95.0
	100人以上	7	2.9	97.9
	missing	5	2.1	100.0
	計	241		

Q5. 部署女性人数	人数	度数	%	累積%
	5人未満	132	54.8	54.8
	5人以上10人未満	52	21.6	76.3
	10人以上20人未満	29	12.0	88.4
	20人以上50人未満	18	7.5	95.9
	50人以上100人未満	4	1.7	97.5
	missing	6	2.5	100.0
	計	241		

Q5/Q4. 部署女性割合	割合	度数	%	累積%
	2割未満	66	27.4	27.4
	2割以上4割未満	73	30.3	57.7
	4割以上6割未満	55	22.8	80.5
	6割以上8割未満	24	10.0	90.5
	8割以上	17	7.1	97.5
	missing	6	2.5	100.0
	計	241		

単純集計：一次元度数表

Q6. 出産後女性の月経痛が少ないことを知ってるか

回答	度数	%	累積%
いいえ	146	60.6	60.6
はい	93	38.6	99.2
missing	2	0.8	100.0
計	241		

Q7. 月経痛と子宮内膜症の関係を知ってるか

回答	度数	%	累積%
いいえ	87	36.1	36.1
はい	152	63.1	99.2
missing	2	0.8	100.0
計	241		

Q8. 月経痛は治療で治ると思うか

回答	度数	%	累積%
思う	147	61.0	61.0
思わない	91	37.8	98.8
missing	3	1.2	100.0
計	241		

Q9. 月経痛のための鎮痛剤使用はどの程度あると思うか

回答	度数	%	累積%
70%	59	24.5	24.5
30%	133	55.2	79.7
10%	36	14.9	94.6
5%	5	2.1	96.7
1%	3	1.2	97.9
missing	5	2.1	100.0
計	241		

Q10. 身内に月経痛で困っている人がいた経験があるか

回答	度数	%	累積%
ある	97	40.2	40.2
ない	143	59.3	99.6
missing	1	0.4	100.0
計	241		

Q11. 月経痛と仕事について相談受けたことあるか

回答	度数	%	累積%
ある	40	16.6	16.6
ない	197	81.7	98.3
missing	4	1.7	100.0
計	241		

単純集計：一次元度数表

Q12. 自分と同じ部署で、月経痛で欠勤した女性の全体(男性含む)に対する割合

回答	度数	%	累積%
1/3以上	5	2.1	2.1
1/5位	9	3.7	5.8
1/10位	36	14.9	20.7
1/30位	20	8.3	29.0
それ以下	44	18.3	47.3
判らない	123	51.0	98.3
missing	4	1.7	100.0
計	241		

Q13. 自分の部署で、月経痛により休憩や早退をした女性の全体(男性含む)に対する割合

回答	度数	%	累積%
1/3以上	4	1.7	1.7
1/5位	9	3.7	5.4
1/10位	31	12.9	18.3
1/30位	20	8.3	26.6
それ以下	45	18.7	45.2
判らない	128	53.1	98.3
missing	4	1.7	100.0
計	241		

Q14. 自分の部署で、月経痛の治療のため休暇をとった女性がいるか

回答	度数	%	累積%
いない	214	88.8	88.8
いる	17	7.1	95.9
missing	10	4.1	100.0
計	241		

Q15. 女性が月経痛で悩んでいる場合仕事の配慮についてどう考えるか

回答	度数	%	累積%
あまり配慮しなくてよい	16	6.6	6.6
ある程度の配慮をした方がよい	154	63.9	70.5
おおいに配慮する必要がある	70	29.0	99.6
missing	1	0.4	100.0
計	241		

Q15. 女性が月経痛で悩んでいる場合仕事の配慮についてどう考えるか
(旧アンケートのみ)

回答	度数	%	累積%
あまり配慮しなくてよい	8	26.7	26.7
ある程度の配慮をした方がよい	22	73.3	100.0
計	30 (旧アンケートのみ)		

単純集計：一次元度数表

Q15. 女性が月経痛で悩んでいる場合仕事の配慮についてどう考えるか
(新アンケートのみ)

回答	度数	%	累積%
あまり配慮しなくてよい	8	3.8	3.8
ある程度の配慮をした方がよい	132	62.6	66.4
おおいに配慮する必要がある	70	33.2	99.5
missing	1	0.5	100.0
計	211 (新アンケートのみ)		

Q16. 月経痛は女性の仕事の評価に影響を与えると思うか

回答	度数	%	累積%
影響を与える	41	17.0	17.0
ある程度影響を与える	99	41.1	58.1
ほとんど影響を与えない	73	30.3	88.4
全く影響を与えない	24	10.0	98.3
missing	4	1.7	100.0
計	241		

Q17. 月経痛は業績や生産性に影響を与えると思うか

回答	度数	%	累積%
対応の如何に関わらず影響を与える	16	6.6	6.6
対応をしてもある程度影響を与える	64	26.6	33.2
対応があればほとんど影響を与えない	144	59.8	92.9
対応の如何に関わらず影響を与えない	16	6.6	99.6
missing	1	0.4	100.0
計	241		

B. 年齢層別クロス集計

Q2.性別

年齢	女	男	計
20歳以上30歳未満	37	12	49
30歳以上40歳未満	49	24	73
40歳以上50歳未満	15	45	60
50歳以上60歳未満	14	38	52
60歳以上	1	5	6
計	116	124	240

missing = 1

ウィルコクソン順位和検定

水準	順位		N	Mean score
20歳以上30歳未満	1	女	116	91.2
30歳以上40歳未満	2	男	124	147.9
40歳以上50歳未満	3			
50歳以上60歳未満	4			
60歳以上	5			
			Z値	P値
			-6.523	0.000

Q3.役職

年齢	管理職	非管理職	計
20歳以上30歳未満	0	49	49
30歳以上40歳未満	11	59	70
40歳以上50歳未満	36	21	57
50歳以上60歳未満	32	19	51
60歳以上	2	4	6
計	81	152	233

missing = 8

ウィルコクソン順位和検定

水準	順位		N	Mean score
20歳以上30歳未満	1	管理職	81	162.7
30歳以上40歳未満	2	非管理職	152	92.6
40歳以上50歳未満	3			
50歳以上60歳未満	4			
60歳以上	5			
			Z値	P値
			7.805	0.000

Q6.出産後月経痛が少ないことを知っているか

年齢	いいえ	はい	計
20歳以上30歳未満	41	9	50
30歳以上40歳未満	43	29	72
40歳以上50歳未満	33	27	60
50歳以上60歳未満	26	25	51
60歳以上	3	3	6
計	146	93	239

missing = 2

ウィルコクソン順位和検定

水準	順位	(男女プール)	N	Mean score
20歳以上30歳未満	1	いいえ	146	109.0
30歳以上40歳未満	2	はい	93	137.3
40歳以上50歳未満	3			
50歳以上60歳未満	4			
60歳以上	5			
			Z値	P値
			3.179	0.002
			(男女プール)	
		(女のみ)	N	Mean score
		いいえ	71	54.0
		はい	45	65.6
			Z値	P値
			1.921	0.055
			(女のみ)	
		(男のみ)	N	Mean score
		いいえ	74	54.5
		はい	48	72.3
			Z値	P値
			2.836	0.005
			(男のみ)	

Q7.月経痛と子宮内膜症との関係知ってるか

年齢	いいえ	はい	計
20歳以上30歳未満	19	31	50

B. 年齢層別クロス集計

30歳以上40歳未満	9	64	73
40歳以上50歳未満	28	32	60
50歳以上60歳未満	26	24	50
60歳以上	5	1	6
計	87	152	239

missing = 2

水準		順位	ウィルコクソン順位検定 (男女プール)		N	Mean score	
20歳以上30歳未満	1	いいえ	87	139.9			
30歳以上40歳未満	2	はい	152	108.6			
40歳以上50歳未満	3				Z値	P値	
50歳以上60歳未満	4				3.472	0.001	*
60歳以上	5						(男女プール)
			(女のみ)		N	Mean score	
			いいえ	22	61.6		
			はい	94	57.8		
					Z値	P値	
					0.512	0.609	NS
			(男のみ)		N	Mean score	
			いいえ	65	66.0		
			はい	57	56.4		
					Z値	P値	
					-1.561	0.119	NS
							(男のみ)

Q8. 月経痛は治療で治ると思うか

年齢	思う	思わない	計
20歳以上30歳未満	25	25	50
30歳以上40歳未満	48	24	72
40歳以上50歳未満	35	23	58
50歳以上60歳未満	36	16	52
60歳以上	3	3	6
計	147	91	238

missing = 3

水準		順位	ウィルコクソン順位検定		N	Mean score	
20歳以上30歳未満	1	思う	147	124.0			
30歳以上40歳未満	2	思わない	91	112.2			
40歳以上50歳未満	3				Z値	P値	
50歳以上60歳未満	4				-1.331	0.183	NS
60歳以上	5						

Q9. 鎮痛剤の使用割合

	70%	30%	10%	5%	1%	計
20歳以上30歳未満	18	28	4	0	0	50
30歳以上40歳未満	24	36	13	0	0	73
40歳以上50歳未満	8	36	9	3	2	58
50歳以上60歳未満	8	31	9	1	1	50
60歳以上	1	2	1	1	0	5
計	59	133	36	5	3	236

missing = 5

水準		順位	クラスカル・ワリス検定 (男女プール)		N	Mean score	
70%	5	20歳以上30歳未満	50	138.8			
30%	4	30歳以上40歳未満	73	127.5			
10%	3	40歳以上50歳未満	58	101.9			
5%	2	50歳以上60歳未満	50	106.9			
1%	1	60歳以上	5	92.3			
			χ^2 乗値	自由度	P値		
			14.084	4	0.007		*
							(男女プール)
			(女のみ)		N	Mean score	
			20歳以上30歳未満	37	66.0		
			30歳以上40歳未満	49	60.7		

B. 年齢層別クロス集計

40歳以上50歳未満	14	50.8
50歳以上60歳未満	14	38.2
60歳以上	1	10.0
χ^2 乗値	自由度	P値
12.420	4	0.0145
* (女のみ)		
(男のみ)		
	N	Mean score
20歳以上30歳未満	12	69.5
30歳以上40歳未満	24	64.1
40歳以上50歳未満	44	54.3
50歳以上60歳未満	36	62.9
60歳以上	4	59.1
χ^2 乗値	自由度	P値
3.3716	4	0.4977
NS (男のみ)		

Q15. 月経痛で悩む女性の仕事の配慮について

年齢	あまり配慮しなくてよい	慮をした方がよい	おおいに配慮する必要がある	計
20歳以上30歳未満	1	33	16	50
30歳以上40歳未満	5	47	21	73
40歳以上50歳未満	4	42	14	60
50歳以上60歳未満	6	29	17	52
60歳以上	0	3	2	5
計	16	154	70	240

missing = 1

クラスカル・ワリス検定

水準	順位	N	Mean score	
あまり配慮しなくてよい	1	20歳以上30歳未満	50	127.6
ある程度配慮した方がよい	2	30歳以上40歳未満	73	119.9
おおいに配慮する必要がある	3	40歳以上50歳未満	60	114.0
		50歳以上60歳未満	52	120.3
		60歳以上	5	138.3
χ^2 乗値	自由度	P値		
1.963	4	0.743	NS	

クラスカル・ワリス検定(新アンケートのみ)

水準	順位	N	Mean score	
あまり配慮しなくてよい	1	20歳以上30歳未満	42	111.3
ある程度配慮した方がよい	2	30歳以上40歳未満	64	105.5
おおいに配慮する必要がある	3	40歳以上50歳未満	55	96.4
		50歳以上60歳未満	46	108.8
		60歳以上	3	141.8
χ^2 乗値	自由度	P値		
3.9557	4	0.412	NS (新アンケートのみ)	